



Title	まえがき
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	子育ての現象学. 2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

まえがき

浜渦 辰二

本書は、3年前に共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有
限性の現象学的研究」(2016～2018年度、基盤研究(B)(一般))に基づき制作し、オンラ
インのみで刊行した研究成果報告書・拙編著『傷つきやすさの現象学』(2020年、大阪大
学学術情報庫：<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>)を継承しながら、新たな課題に取り
組んだ共同研究「子育ての現象学—フィンランド・ネウボラをフィールドに—」(2019～2022
年度、国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)))の研究成果報告書・拙編著『子育て
の現象学』を同様にオンラインで刊行するものである。

日本の現象学研究者がフィンランドのネウボラ(出産・子育て支援センター)のフィー
ルド調査をフィンランドの現象学研究者とともに国際共同研究として行うという計画で、当
初、共同研究の期間としては2019～2021年度の3年間の計画であった。ところが、2019年
度最後の2020年3月に第1回のフィールド調査を予定していたところ、2020年に入ってから
新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行(パンデミック)が始まり、緊急
事態宣言も発出されるなか、やむをえず延期となった。その後も、何度も感染の波が断続的
にやって来るなか、何とか合間を縫って渡航できないものかと計画するたびに断念せざる
をえない状況が続き、やむなく、研究期間を1年間延長し2022年度までとした。

2022年度も感染は2月を山とする第6波、8月を山とする第7波と続き、もはやフィー
ルド調査を諦めざるを得ないかと危惧しながら、それでも2023年3月までのどこかで渡航
できるようになることに最後の望みを賭けつつも、共同研究の比重をフィールド調査から
文献調査へと移して、むしろ本論文集の刊行に力を入れることへと移行していった。2023年
1月を山とする第8波が2月になって収まってきたのを見て、急遽、3月上旬から中旬にか
けて最後のチャンスと渡航を決め、当初複数で行く計画であったが、それぞれ諸般の事情か
ら叶わず、結局、筆者が一人でフィールド調査のため渡航することとなり、その研究報告は
本書第8章にまとめることができた。

20世紀初頭1918～1920年の通称「スペインかぜ」(正確には、「H1N1亜型インフルエン
ザ」)以来、100年に一度の世界的パンデミックがかつてと同様に2020～2023年と3年間続
くなか、私たちの共同研究も当初の計画通りには進まず、予定変更をせざるを得なかったが、
小規模なものとはなったもののフィールド調査(訪問・インタビュー)もすることができ、
本書のような形で論文集を研究報告書として編むことができ、とりあえずは将来へ続くた
めの足がかりとなるものを残すことができたと考えている。

共同研究者の皆様に感謝するとともに、読者からの助言・批判を仰ぐことができれば、幸
いである。